

【研究論文】

1992年の「精神薄弱」用語問題:

議論 3・『発達の遅れと教育』(全日本特殊教育研究連盟)1992年第415号を中心として

Argument About the Terminology Problem of "Mental Deficiency"  
in 1992.

鶴田一郎

Ichiro TSURUTA

『広島国際大学 教職教室 教育論叢』

“*Hiroshima International University Journal of Educational Research*”

ISSN:1884-9482

第14号 抜刷

Off Print of the 14<sup>th</sup> issue

広島国際大学 教職教室

Issued by Hiroshima International University Teacher Education Unit

2022年12月

December, 2022

## 1992 年の「精神薄弱」用語問題：

議論 3・『発達の遅れと教育』（全日本特殊教育研究連盟）1992 年第 415 号を中心として

広島国際大学教職教室 鶴田一郎

**要旨：**知的ハンディキャップを持つ人を、どう呼称するかは、現在に至るまで議論が途絶えることが無い。それは、どのような「用語」を用いても変わらない。本研究では、筆者の師である伊藤隆二教授が提唱している『『障害児』から『啓発児』へ』の思想を研究の出発点とする。近江学園の創立者・糸賀一雄氏は「この子らを世の光に」と言われたが、伊藤教授は、それを更に進めて「この子らは世の光なり」と主張される。なぜ「この子らは世の光なり」なのか、また、なぜ「障害児」ではなく「啓発児」なのか、ということの本研究は解き明かしたい。その際、まず「伊藤隆二」と、その師である「三木安正」を比較対照し、次に伊藤の「発達観」を明確にした上で、1992 年に特に集中した「精神薄弱」用語問題に関する議論の内、特に今回は、『発達の遅れと教育』（全日本特殊教育研究連盟）1992 年第 415 号「特集 人権と用語問題」に焦点を当てて検討した。その際、座談会「人権にかかわる用語をどう改めるか」の中の「伊藤隆二」に言及された箇所を手がかりにし、更に伊藤隆二の「障害児」を廃し「啓発児」と呼ぼう、すなわち「この子らは世の光なり」の思想を基督教の視点から考察した。その結果、知的ハンディキャップのある「この子ら」は、その「弱さ」ゆえに神に選ばれた存在であり、その「弱さ」ゆえに神の光を、そのまま受け容れ、自らが「世の光」となる。「この子ら」の光を身に受けた眼の前が曇っていた「強者」の内、目覚めた者は、己の至らなさを自覚し、正しくものを見ることに覚醒し、自ら低きに視点を移して正しく生きるようになる。そのような人が一人でも増える社会が達成されれば、「この子ら」は「障害児」ではなく「啓発児」と呼ばれるのが相応しいということになることがわかった。

### はじめに—問題の所在—

特別支援教育に関する内外の歴史研究は興隆を見せている。それは教育方法論や実践論に加えて、歴史的社会的文脈における特別支援教育の在り方が重視されてきているからである。その際、研究に用いられる用語、特に知的ハンディキャップを持つ人々を、どう呼ぶかは、いつの時代でも議論の的であったのにもかかわらず、いつの間にか忘れられる。現在は「知的障害」あるいは「精神遅滞」で統一されたかに思われるが、それにも問題がないわけではない。1980 年代までは「精神薄弱」が使われていた。それでは、なぜ現在は「知的障害」「精神遅滞」で統一されているのか。その謎を解く鍵は 1992 年に知的ハンディキャップに関する研究団体・支援団体などが行った「精神薄弱」用語問題に関する議論にある。そこで本研究では 1992 年の「精神薄弱」用語問題の議論を中心と

して、その前後のみならず、現在までの、この問題についての検討を背景に、今後、この議論を深めていく際の客観的な「たたき台」を提示しようと思う。但し今回は紙幅の関係で、『発達の遅れと教育』（全日本特殊教育研究連盟）1992年第415号「特集 人権と用語問題」に焦点を当てて検討する。その際、まず「伊藤隆二」と、その師である「三木安正」を比較対照し、次に伊藤の「発達観」を明確にした上で、座談会「人権にかかわる用語をどう改めるか」の中の「伊藤隆二」に言及された箇所を手がかりにし、更に伊藤隆二の「障害児」を廃し「啓発児」と呼ぼう、すなわち「この子らは世の光なり」の思想を基督教の視点から考察したいと思う。

なお、現在の「全日本特別支援教育研究連盟」のHPから、その概要を以下に紹介する（全日本特別支援教育研究連盟 2017）。

## 全特連とは？

### 1 全特連という団体

- ・ 障害等のために特別な教育的ニーズのある子どもの教育にかかわる教師等の団体。
- ・ 全国52の都道府県市関係団体で構成される連合体であるが、個人会員制度も導入されている。副理事長3名のうち2名は、それぞれ全国特別支援学校知的障害教育校長会、全国特別支援学級設置学校長協会の推薦を経た者、他の1名は個人会員から選出された者。
- ・ 知的障害をはじめ、自閉症、LD[学習障害——引用者、以下同じ]、ADHD[注意欠陥/多動性障害]等々、発達上に障害のある子どもの教育に関心のある人は、どなたも個人会員になることができる。

### 2 創立と沿革

- ・ 全日本特別支援教育研究連盟の前身、特殊教育研究連盟の結成年月は1949（昭和24）年6月。
- ・ 特殊教育研究連盟編「精神遅滞児教育の実際」（牧書店）の発行年月が連盟結成年月
- ・ 本書の序文は文部省初等教育課長坂元彦太郎、まえがきは文部省視学官三木安正。
- ・ 企画編集三木安正・小杉長平・杉田裕（品川区立大崎中学校分教場）
- ・ 本書の印税で「連盟ニュース」等を発行配布。
- ・ 1950（昭和25）年5月、特殊教育研究連盟の機関誌として、「児童心理と精神衛生」を発刊（隔月刊行）。
- ・ 創刊のことばから——「余りにも立派な言葉はもうたくさんだ。貧しくとも心のこもった素朴な行いと言葉がほしい。この雑誌が実際家と研究者とを結合させ、さらに海外の同志とも手を結ぶ機縁を作ることを期待する」（三木安正）。

- ・創刊から6年後、1956（昭和31）年5月号・通算30号で廃刊。
- ・1952（昭和27）年1月、文部省の第1回全国特殊学級研究協議会が下関市で開催——以後、毎年の全国的集会となるが、特殊教育研究連盟との関係については、「文部省主催といっても、その実質的運営は全特連のメンバーが、その衝<sup>しょう</sup>にあたってきた」（三木）とのこと。
- ・翌年2月、第2回全国研究協議会が東京千代田区で開催——閉会後の本連盟の会で、「特殊教育研究連盟」を改組し、「全日本特殊教育研究連盟」の結成を決める。
- ・規約が承認され、三木安正理事長、小宮山<sup>こみやまやまと</sup> 俊<sup>せいちょう</sup> 事務局長(事務局都立青鳥中学校)選任。
- ・1962（昭和37）年11月、名古屋市での第11回全国協議会（この時代は精神薄弱教育全国協議会）から、その前日等に全特連独自の研究大会をもつ——この年の全特連独自の会を「第1回全特連研究大会」と銘打つ。<sup>めいろう</sup>
- ・シンポジウムテーマ「精薄児教育のための精薄研究」シンポジスト 岸本<sup>きしもとけんいち</sup> 謙一(名古屋市医大・医学)、丸井<sup>まるい</sup> 文男(名大[名古屋大学]・心理学)、高瀬<sup>たかせ つねお</sup> 常男(京大・教育心理学)、三木安正(東大・社会調査)、司会杉田裕(東教大[東京教育大学、現・筑波大学])。
- ・名古屋大会以来、翌1963（昭和38）年11月札幌で、1964年11月岐阜で、1965年12月東京で、文部省に「寄生的ではあるが、全特連独自のものが行われていた」(三木)。
- ・1966(昭和41)年10月、長野市での大会から、文部省から離れ全特連独自の全国大会を開催——名古屋大会から数え、第5回精神薄弱教育研究全国大会と銘打つ。<sup>めいろう</sup>
- ・長野大会における三木理事長あいさつ「講習会的なものは文部省主催でもよいが、研究会的なものは、国民団体にあるものの方が原則的によい」
- ・機関誌「児童心理と精神衛生」廃刊後、1956(昭和31)年12月、新たに「精神薄弱児研究」発刊。
- ・刊行にあたっての三木理事長のことば「新機関誌は特殊教育に挺身<sup>ていしん</sup>するものがお互いに学び、お互いにはげまし合い、かつ日々の仕事をするための具体的資料を提供するものでなければならない」
- ・1964（昭和39）年4月、機関誌「精神薄弱児研究」の発行を日本文化科学社に移管。
- ・1985（昭和60）年4月、機関誌名「精神薄弱児研究」を「発達の遅れと教育」に変更。
- ・2006（平成18）年4月、機関誌名「発達の遅れと教育」を「特別支援教育研究」に改題。
- ・2009（平成21）年4月、機関誌「特別支援教育研究」の発行を東洋館出版社に移管。

・全特連歴代理事長

故 三木安正	東京大学名誉教授	1953年（昭和28年）～1984年
故 <small>やまぐち かおる</small> 山口 薫	東京学芸大学名誉教授	1984年（昭和59年）～1995年
故 <small>こいで すずむ</small> 小出 進	千葉大学名誉教授	1995年（平成7年）～2007年
<small>まつ やかつひろ</small> 松矢勝宏	東京学芸大学名誉教授	2007年（平成19年）10月～

### 3 現在の主要役員

- ・理事 まつ やかつひろ 長 松矢勝宏（東京学芸大学名誉教授）
- 副理事 むらの かずおみ 長 村野一臣（全国特別支援学校知的障害教育校長会会長）、やまなか ともえ 山中ともえ（全国特別支援学級設置学校長協会会長）、めい官 茂 明官 茂（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 情報・支援部長《兼》上席総括研究員）
- ・事務局長 はやかわともひろ 早川智博（東京都立江東特別支援学校校長）、さかぐちしょうへい 庶務部長 坂口昇平（東京都立羽村特別支援学校校長）、かわさきかつひさ 会計部長 川崎勝久（新宿区立東戸山小学校校長）、さとうしんじ 事業部長 佐藤慎二（植草学園短期大学教授）、なごやつねひこ 出版部長 名古屋恒彦（岩手大学教授）、くろさわかずゆき 研究部長 黒澤一幸（山村学園短期大学教授）、かねこ たけし 国際等連携部長 金子 健（明治学院大学名誉教授）

### 4 事業

1. 機関誌「特別支援教育研究」（月刊）の編集刊行。
2. 年次全国大会の開催。
3. 全国7地区別研究大会の開催。
4. 全国3会場での夏期研修セミナーの開催。
5. 日本発達障害連盟諸事業への協力参加。

[以上、全日本特別支援教育研究連盟2017から]

## 1. 「三木安正」と「伊藤隆二」の比較対照と、伊藤隆二の「発達観」

「教育関係者の集まり」である「特殊教育研究連盟」は1949年設立されたが、1953年改称し「全日本特殊教育研究連盟」（波線は1992年時点での名称）になり、更に2006年改称し現在は「全日本特別支援教育研究連盟」である。機関誌名も1950年発刊『児童心理と精神衛生』から、1956年改称し『精神薄弱児研究』、1985年改称し『発達の遅れと教育』（波線は1992年時点での名称）、更に2006年改称し現在は『特別支援教育研究』である（三木1985、池田・大庭・小出・小宮山・山口・藤島1985、全日本特殊教育研究連盟1999、松矢2000、北沢2002）。

本節では、この「研究連盟」の主要創設メンバーの一人であった「三木安正」の『児童心理と精神衛生』創刊号(1950年)の「創刊のことば」、同じく改称後『精神薄弱児研究』創刊号(1956年)の「新機関誌発刊に当って」を最初に検討する。次に伊藤隆二氏の論文(1985年)を考察する。つまり

「三木安正」の見解と「伊藤隆二」の見解の対照である。なお、伊藤隆二教授は三木安正の直弟子であり、筆者の師である。

## 1.1 三木安正教授の「二つの巻頭言」

### 1.1.1 三木安正(1950)「創刊のことば」

三木安正は『児童心理と精神衛生』創刊号の「巻頭言」を次のように綴っている。(なお、旧字体は新字体に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めて引用している。)

#### 創刊のことば

三木安正

1948年度以来各地で行われた文部省主催による精神遅滞児教育の講習会に呼応して、この方面の教育に挺身する教育者や、これと連関のある分野で研究している心理学者や精神医学者達の協力体制を作ることを目的とする特殊教育研究連盟が生まれたのは昨年春[1949年春——引用者、以下同じ]のことである。

連盟ではまず「精神遅滞児教育の実際」[特殊教育研究連盟(1949)]という本を編集し、ついで隔月ぐらいにニュースを出して、同志をつのつて来たのであるが、いよいよ機が熟してきたので、ここに機関誌として「児童心理と精神衛生」という標題をつけたのは、問題を広く取り上げ、高い視野から考えて行こうとするためであるが、それはわれわれの集まりの主たる関心が児童心理、精神衛生、特殊教育などの分野にあると共に、これらのものを連関的に考えながら、それぞれ独自の研究分野を拓いて行こうという意図のあらわれでもあるのである。この意図は必然的に、この雑誌の内容の主体をなすものが実験と、実践と思索の結果であることを要求する。

余にも立派な言葉はもうたくさんだ。貧しくとも心のこもった素朴な行いと言葉がほしい。この雑誌が実際家と研究者とを結合させ、さらに海外の同志とも手を結ぶ機縁を作ることを期待している。(文部省視学官)

[三木 1950, p.3]

上の文にある「余にも立派な言葉はもうたくさんだ。貧しくとも心のこもった素朴な行いと言葉がほしい」という言葉からは、三木が学生時代の伊藤に言っていた「頭を高くするな。この子らから学べ」という言葉を連想した。この言葉を敷衍して行けば、我々研究者・実践者は「この子ら」を「啓発児」として「この子ら」から学べということであろう。表現は違うが、伊藤の「この子らは世の光なり」の発想の原点は「三木安正」にあったのではなかろうかと思われる。

### 1.1.2 三木安正(1956)「新機関誌の発刊に当って」

三木安正は改称した機関誌『精神薄弱児研究』創刊号の「巻頭言」では次のように述べている。(なお、旧字体は新字体に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めて引用している。)

### 新機関誌の発刊に当たって

三木安正

終戦後、教育界がその本来の姿を求めて立ち直ろうと懸命な努力をはじめたころ、精神薄弱児に対する教育もその一隅<sup>いちぐう</sup>に頭を出してきた。その芽生えを育てようと、われわれは昭和24年[1949年——引用者、以下同じ]の春に特殊教育研究連盟を結成し、当時の各地の特殊学級の実践記録を集めた「精神遅滞児教育の実際」を刊行してから約10冊の図書を世に送り、昭和二十五年[1950年]五月から「児童心理と精神衛生」という標題の雑誌を隔月発行し本年[1956年]五月第30号に達したのであるが、この雑誌は、わが国の特殊教育の水準を高めるために、広い視野に立ち、かつ研究的なものをという方針であったため、教育の現場から遊離<sup>ゆうり</sup>する結果を来たしてしまっ

た。一方、特殊教育は次第に普及し、精薄児のための特殊学級も1,000学級に近づく勢いとなってきたので、連盟が本来の使命を果たすためには、この雑誌の性格を根本的に改めるべきだという結論に達した。

そこで、ここに新しく機関誌を発刊することとなったのであるが、新機関誌は、特殊教育に挺身<sup>ていしん</sup>するものがお互い学び、お互いはげましあい、かつ日々の仕事をすすめるための具体的資料を提供するものにならねばならないと思う。

そして、そういう性格をもたらすためには、会員自身が、これを自分のものとして、育てるといふ心構えになっていただかなければならないと考えられるので、発刊に当たってこのことを切<sup>せつ</sup>にお願いするものである。

〔三木 1956, p.27〕

上の文にある、前誌『児童心理と精神衛生』が「教育の現場から遊離する結果を来たしてしまっ

た」と反省した三木は、より実践者に役立つ内容を盛り込んだ雑誌『精神薄弱児研究』を構想する。「実践者に役立つ内容」とは、すなわち究極的には「この子ら」と、共に学び合い、共に教え合い、共に補<sup>おぎな</sup>い合い、共に扶<sup>たす</sup>け合い、共に生きていくことの参考になる内容ということである。しかし、伊藤には「頭を高くするな。この子らから学べ」と言っていた三木だが、三木本人は「教師」や「指導者」といった上からの立場を「この子ら」に強く打ち出していた。一時期、三木が私財を擲<sup>なげう</sup>って設立した「旭<sup>あさひ</sup>出学園」では「肉体強化」を中心とした「スパルタ教育」が行われていたのも事実もある。とにかく「この子ら」を社会に「適応」(adaptation)させなくてはならぬ、それにはまず「体力」だ、と考えた時代があったのである。ただ三木を擁護<sup>ようご</sup>するわけではないが、伊藤の話によれば三木は「この子ら」から常に「父のように」慕<sup>しよ</sup>われていたという。三木の根本姿勢には伊藤と共通のものがあつたのである。その表現方法が多少異なっていたに過ぎないのかもしれない。

#### 1.2 伊藤隆二の論文(1985年)—その「発達観」について—

『発達の遅れと教育』（全日本特殊教育研究連盟）1985年第323号には伊藤隆二の「発達の遅れている子どもたち—能力主義から『人間主義』への転換を—」が掲載されている。誌名が『発達の遅れと教育』となっている以上、直接的に「発達の遅れ」という言葉を「批判する」ほど伊藤は社会性が欠如しているわけではないので、非常に遠回しの「論述」になっているが、ここで述べたかつ

たのは伊藤自身の「発達観」であったと思われる。そこで以下に伊藤隆二教授独特の「発達観」を紹介する。

伊藤隆二の発達に関する見解は、あくまでも個人の発達に焦点が当てられており、その個人の成長の過程を「他者とかかわり自己を発見していく」自己変革の過程と捉え、<sup>とら</sup>自らのかけがえのない一回限りの生を意義深く自分なりに「生きること」こそ、発達という概念の中核である、とまとめられる。

AさんはAさんなりに、BさんはBさんなりに、ありのままにそのままに自分として生きていくことが「発達」であり、発達を数値化して「AさんはBさんより発達している、能力が高い、進歩している」などと比較して論じるのは無意味であり、有害ですらある。

それは他者とかかわり自己を発見していく自己変革の過程を<sup>そが</sup>阻害するからである。このことを伊藤(1997)では、人間はいかなる人も「一人ひとりかけがえのない、独自の存在であり、それはその一人ひとりの人生目標や生きる意味を有している」「そしてその一人ひとは自分なりに生存(生きること)と人生の完成(人間としての成熟)へ向かって努力しているところにこそ価値がある」(p.141)と言い切り、伊藤はその「努力の過程」を<sup>そが</sup>発達とみたいと結んでいる。

このような考えに至る背景には、伊藤の50年以上にわたる「この子ら」「この人ら」に関する臨床・教育・研究の結果、<sup>かいきせい</sup>確信された「回帰性発達観」がある(伊藤 1992a・伊藤 1992b)。「完態」という言葉を使って表現すれば、「回帰性発達観」では、ある子ども(ある人)の誕生からこれまでの人生は、どの瞬間をとっても「完態」であったのであり、今後の人生も死に至るまで「完態」であり続けると考える。

この場合の完態とは、その人なりの自己変革への「最善の努力」を指す。したがって<sup>たと</sup>例えば子どもは大人時代への準備のために生きているのではない。つまり、その人の「今、ここでの人生」は、次のステップとして存在しているのではなく、人生の過程にあつて人間は、その時その時に自らのかけがえのない生を全うしているのである。

大乘仏教の「唯識」では<sup>えんじょうじつじょう</sup>「圓成實性」や<sup>こくこくえんじょう</sup>「刻刻圓成」と言う。「圓成實性」とは「全部が一であるという世界をまどやかに完成した真実の性質」(岡野 1999, p.195)を言い、その場合の<sup>えんじょう</sup>「圓成」とは「もとより完成されているもの」「円満に成就すること」を指す。したがって「刻刻圓成」で「人間はどのような人も、もとより誕生から完成している。そして、その後、死に至るまでも含めて、人生のいかなる発達段階においても完成している」ことを言う。このことから、人生の、どの段階においてもその人として精いっぱい生きることの重要性が示唆される。

また「回帰性発達観」の「回帰」とは「その根に復帰する」という『老子』第十六章の一節から来ている。それは「万物並作、吾以觀復、夫物芸芸、各復歸其根、歸根曰靜、是謂復命(あらゆる生物はどれもこれも盛んにのびる。わたくしは、それらがどこへかえってゆくのかをゆっくりながめる。あらゆる生物はいかに<sup>しげ</sup>茂り<sup>さか</sup>栄えても、それらがはえた根もとにもどってしまうのだ。根もとにもどること、それが静寂とよばれ、運命に従うことといわれる)」(小川環樹 訳注 1997, pp.43-44)というものである。これを引用し、伊藤(1992a, p.122)では「人も生まれてから、その人なりの人生を一刻一刻とすごし、そして死ぬことで『その根に復帰する』と述べている。これを「回帰」と

呼んでいるわけである。人間は誕生から死に至るまでの自らの人生過程において、その時その時を精いっぱい自己変革の努力を行なっているのであり、「その根に復帰する＝死」の瞬間まで<sup>みずか</sup>自らの人生を生きることが重要だと伊藤隆二は主張しているのである。

## 2. 特集号の座談会「人権にかかわる用語をどう改めるか」—「伊藤隆二」への言及—

本節では特集号の座談会「人権にかかわる用語をどう改めるか」の中で、伊藤本人は事情により「座談会」を欠席しているのにもかかわらず、「伊藤隆二」に言及している参加者が二名いるのに着目して、この二名の方の主張を、ここでは検討してみたい。

### 2.1 議論の契機—松友了氏の発言—

1980年代から「精神薄弱」用語問題の議論は続いていたのに、具体的に新しい呼称に置き換える結論には至っていなかった。その呼称の置き換えの一つを提案したのが伊藤隆二の論文(伊藤1990a)であり、「障害児<sup>しょうがいじ</sup>」を廃し、「啓発児<sup>けいはつじ</sup>」と呼ぼう、と主張されたのである。その伊藤の提案が契機となり他の人々によっても新しい用語の提案が徐々に始められ、1992年に一つの興隆を見た。このことについて松友了<sup>まつともりょう</sup>によって次のように報告されている。

〔松友了の発言—引用者、以下同じ〕もう一つ、従来と違うのは、具体的な提案がなされるようになったということです。今日は都合でいらっしゃっていないけど、伊藤隆二さんの役割は大きかった。あの人の提案については私[松友]は批判的ですが、具体的にこういう表現をしようと提案したことは評価したい。

多くの人は、問題を分析したり、人の提案を批判したりするけども、こう変えたらいいんだという提案をしなかった。伊藤さんがとんでもないロマンチックな提案[「この子ら」を「啓発児」と呼ぼうという提案]をされたので、あんな用語になったら困るということで、みんな自分の提案を始めたように思います。

〔清水・関・田ヶ谷・松友・山口・小出1992, p.26〕

なお、以上の松友の発言は、前後の文脈から考えれば、伊藤隆二への単なる「批判」ではなく、伊藤の提案(「障害児」を廃して「この子ら」を「啓発児」と呼ぼうという提案)により「精神薄弱」用語問題の議論が活発になったとの肯定的意味合いの発言である。

### 2.2 「精神」の意味—山口薫氏の発言—

「精神薄弱」、つまり「精神」が薄く弱いという場合、その「精神」をあまりに安易に使用し過ぎているのではないかという点に触れ、以下のように山口薫<sup>やまぐちかほる</sup>氏が「伊藤隆二」に言及している。

精神薄弱という言葉はよくないと思いますが、精神という部分に対する問題と、薄弱に関する問題がありますね。英語の場合もメンタル[mental——引用者、以下同じ]をインテレクチュアル[intellectual]に変える傾向があるけど、英語でいうメンタルと日本語の精神とはだいぶ違うんですね。『発達障害研究』の用語問題特集号で伊藤さんも書いている[伊藤 1992c]けど、精神には日本独特の意味合いが含まれてるから、問題があるのかなという気がします。けれども知的とか知能と限定してしまうとまた別の意味で問題が出てくるのではないかな。

〔清水・関・田ヶ谷・松友・山口・小出 1992, p.30〕

山口薫の上の指摘は、「精神薄弱」用語問題で重点が置かれたのは「薄弱」の方だったが、実は「精神」という言葉の使い方も大きく検討が必要だということである。現在では医療を中心として「精神遅滞」という言葉も残っているが、法律の文言はすべて「知的障害」で統一されている(岩井 1999)。「精神」という言葉は極力「この子ら」には使われなくなっているが、その一因として上の山口の発言の中で紹介されている伊藤隆二の論文(伊藤 1992c)で次のように明確に指摘されていることもあるだろう。

哲学者の西谷啓治<sup>にしたにけいじ</sup>[西谷 1957——引用者、以下同じ]によると、日本語の「精神」には中国から影響されている場合がほとんどであるが、現在のわが国においていわれている「精神」は spirit (英語), esprit (仏語), Geist (独語)などのヨーロッパ語の翻訳である、という。そしてそれらの意味の源流をたどれば、いずれも pneuma (ギリシャ語)に至るが、これは動詞 pneō (吹く、息吹く)と結びついた語で、もともと風・空気などを意味し、さらに呼吸の<息>、また生命としての<気>となる。ラテン語の spiritus が動詞 spiro (吹く、息吹く)と結びついているのも同様である。やがてこれらの語が<息>としての生命と、自覚性をもった心とを一つにした意味をもつものとなって、形而上学的、倫理的な、さらには宗教的な背景をもつに至ったのである。その証拠に holy spirit (聖霊)は神の<精神> pneuma を指す。その例は「風は思いのままに吹く、あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかを知らない。霊から生まれる者はみな、それと同じである」(「ヨハネによる福音書」3章 8節)や、「神は霊であるから、礼拝する者も、霊とまことをもって礼拝すべきである」(同 4章 24節)の聖句に出てくる<霊>にみられる。これが「精神」を指すことは神(という精神)を自己に受けることで、肉体の死とともに神の「永遠の生命」に生かされる、という自覚を呼び起こす。

西谷は次のように説明している。「神の精神を自己の精神に受け、自己に死して神の(永遠の生命)に生かされるということが、救いなのであり、同時に霊性的(精神的)spiritual [誤植と思われる。正しくは spiritual]な自覚なのである。-----しかし、その訳語として、現在日本で<精神>という言葉が使われる場合には、そういう背景が希薄になって、ただ人間の心的態度というようなばくぜんとした意味になっている。<精神>という言葉がそういう浅い、平凡な意味になっているというその事実が現在の日本の精神状況を示す一つの指標でもある」。

〔伊藤 1992c, p.2〕

## 2.3 「特集 人権と用語問題」掲載論文—「座談会」以外—

なお、「座談会」の他、『発達の遅れと教育』（全日本特殊教育研究連盟）1992年第415号「特集 人権と用語問題」では以下の4点の論文が掲載されている。

1. 櫻井芳郎：人権と用語—その背後にある社会意識—
2. 安藤房治：教育の場における人権侵害
3. 北沢清司：知的障害者の親の立場からみた人権と用語
4. 柴田洋弥：知的障害をもつ人たちは自分の障害とその用語についてどう考えているか

## 3. キリスト教信仰を基礎にもつ伊藤隆二の教育思想

伊藤隆二の「障害児」を廃し「啓発児」と呼ぼう、という呼びかけは「単なるロマンチストの発想だ」「現実を知らぬ大学教授の戯言だ」「気持ちは分かるが社会的偏見の変革が先だ」などの批判を浴びた。筆者も何人かの人から直接、伊藤教授への批判を聞いている。筆者が30歳代であった1990年代には、その批判のいくつかは「致し方のないもの」に思えた。しかし50歳代後半になった今、その批判のほとんどは筆者自身にも向けられていると感じている。すなわち一人娘も成人し、それまでの彼女の成長を考える時、親としての至らなさを痛感し、伊藤教授への「批判」が、そのまま自分にも当てはまると思うのである。

そこで本節では、伊藤隆二の教育思想の根幹にある「キリスト教信仰」の考え方を使って、なぜ「この子ら」は「啓発児」と呼ばれるべきなのかを以下、考察する。その際、「神の選び」「最も小さい者」「弱さの力」「この子らは啓発児なり」「この子らは世の光なり」と順を追って考察する。

### 3.1 「神の選び」

神は、この世を救済する御業の協力者として「愚かな者」「弱い者」「身分の低い者」「軽んじられている者」「無きに等しい者」[前者]を「あえて」選ばれた。決して「知者」「強い者」「有力な者」[後者]は選ばれなかった。それどころか、神は前者を選ぶ目的を、後者を「はずかしめるため」「無力な者にするため」と言い切っている。これは前者を通じた救済と解放の御業が達成される時、それが後者のような人々の力や技で成し遂げられたものではなく、神そのものの御業であることを明確に示すためである。もちろん「この子ら」は前者である。なぜなら「神のみまえに誇ることがないためである」。もっと言うならば、「この子ら」は神が創造された「この世」を決して汚すことがないからである。一方、後者は自分の能力や業績や身分や財産を「誇り」、中には「この世」自体の崩壊につながるような「大量破壊兵器」を生み出す人もいる。伊藤隆二は「あなたは後者のように驕り高ぶって前者の人を下に見る人間になりたいですか。それとも『この子ら』に代表される前者

のように神の使徒として『この世』の救済と解放の協力者として生きていきますか」という我々健常者と言われる人々に究極の問いを突き付けている。

### 3.2 「最も小さい者」

聖書による「最も小さい者」とは、神が選ばれた「世の無学な者」「世の無に等しい者」「身分の卑しい者」「見下げられている者」(コリントの信徒への手紙一 第1章 第27節—第28節——以下、聖書からの引用は新共同訳『聖書』(1987)による)であるが、より具体的には、子ども、女性、病气の人、障害のある人、飢えている人、身体を売る人、罪人、奴隷、取税人、羊飼いや豚飼いやなどの牧畜人、行商人、小売り商人、日雇い労働者、門番・女中・給仕などの奉公人、サマリア人、異邦人などを指す(滝澤 1997)。それらの人々は、才能、財産、地位、教養もなく、強い者から、疎んじられ、蔑まれ、虐げられ、痛みつけられ、押し潰されていて、いわば一見、自分の内にも外にも自分を奮る力を見出せない人々である。

「人の子」イエスは、父親がはっきりしない母マリアの子として生まれ、父ヨセフは、その批判に耐えながら生きた。そしてイエスは「石工」として生きていた。「石工」は現在の「大工」とは異なる職業差別を受けていた人々である。すなわち、イエスも「最も小さい者」であった。そして同胞ユダヤ人律法学者に疎まれローマ帝国の名のもとに十字架刑を受ける。その末期の際「アッバ」(ヘブライ語・アラム語の「お父さん」と叫びながら、この世のすべての罪を背負って死んでいくイエスは「神の子」となる。「人の子」であり「神の子」であるイエス＝キリストの誕生である。「神人」イエスは「最も小さい者」の筆頭であり導き手でもある。処刑から3日後「復活」されたイエスは天上に昇られ「最も小さい者」の守護者となられた。

「この子ら」は「最も小さい者」である。そして我々も「最も小さい者」である。「神の似像」(imago Dei)として創造された我々人間は神から授けられた本来の「善」という側面だけでなく、「被造物」としての限界から「悪」の誘惑を逃れることができない側面も持つ。すなわち生まれながらに「原罪」を背負っているのである。したがって、すべての人が「最も小さい者」なのである。しかし、聖母マリアが「無原罪の聖母」と呼ばれるように、「この子ら」は人間の中では最も「無原罪」に近い。それに倣い、我々健常者も自分の身を低くして「最も小さい者」＝「この子ら」と連帯することを伊藤隆二は主張している。

そのためには本田哲郎神父(2001)の「メタノイア」の考え方が最も参考になる。本田神父は大阪の日雇い労働者の町である“釜ヶ崎”で支援活動を行うカトリックの神父である。メタノイアとはふつう「悔い改め」「回心」などと翻訳されてきているが、本来は「視点の転換」(本田 2001, p.16)を意味する言葉であり、ギリシャ語新約聖書原典の文脈から言うと「低みに立って見直す」(本田 2001, p.17)ということを目指す。

「低みに立って見直す」と言っても本田神父も最初、誤解していたように「日雇い労働者」＝「最も小さい者」と同じ生活をするということではない(本田 2006, pp.50-55)。そうではなく「視点を低くもつ」すなわち「日雇い労働者の目線に立って考え行動する」という点に本田神父は気づかれ

た。正に「低みに立つ」＝「下に立つ」(understand)は「最も小さい者」を「理解する」(understand)ことから出発する。そうなれば「最も小さい者」＝「この子ら」を「上から視線」で見下したり、蔑んだり、虐待したりということはなくなる。この「メタノイア」の考えは伊藤隆二の考えと通底し、同じ地平に立つ「主体」同士、「人間」同士が、互いに「最も小さい者」として語り合い、関わり合い、補い合い、助け合い、それぞれが「自分として」生き生きと、その「生」を全うする前提となるものである。

### 3.3 「弱さの力」

正に伊藤隆二が述べるのは「発想の逆転」である。通常の社会の価値観では「強い者」が人を助けると考える。しかし、それは逆で「弱い者」が人を助ける。福音(The Gospel)の価値観は通常の価値観とは異なるのである。神の力を受け、人を生かすのは「弱い人」である。「弱い人」は他人の悲しみ・苦しみ・痛み・孤独・悔しさ・怒りがわかる。そうだからこそ人を真に励まし鼓舞することができる。再び立ち上がる力を人に与えることができる。「弱い人」＝「最も小さい者」＝「この子ら」の視点まで下がって、その生き方を学ぶ時、真の相互理解と救済・解放が、この世に出現する。我々は頭を垂れ神の使徒である「この子ら」から真摯に学ぶことが重要であると伊藤隆二は主張している。

### 3.4 「この子らは啓発児なり」

「この子らは世の光なり」とは何のことだろう。それは一言で言えば「この子ら」が「世の光」として灰色の雲に蔽われた「この世」を照らし、我々の曇った眼を開かせ、「真理の道」を指し示すことであろう。静(1993)は光の働きを「照らす、暖める、燃やす、浄める」(静 1993, p.22)にまとめている。この考え方を敷衍して「この子ら」の、この世に存在する「特別な目的」を考察すれば次のようになる。

「照らす」には人々の見える高いところに置かれる必要がある。「この子ら」を社会の片隅に置くのではなく、中央の高いところに置くのである。それによって、この世界の闇を明るく照らし、この世で生きる人、「この子ら」の光によって曇った眼が開かれた人の苦悩をやさしく包み込む。「暖める」とは何を暖めるのか。曇った眼が開かれた人の冷たくなった心を温め、消えそうであった希望を暖める。この世の冷め切った愛をもう一度暖める。「燃やす」とは何を燃やすのか。この世は妬みや怒りや憎しみの火で燃えている。その火で傷つき立ち上がれない人が無数にいる。その人たちを無限大の愛の火、つまりは神の愛＝アガペ(Agape)＝無償の愛＝献身の愛の炎の中に包み込み、すべてを「この子ら」の生き方に倣うことである。「浄める」とは何を浄めるのか。アガペの火はすべての悪と罪、過誤を燃やし尽くし、この世を浄める。それは同時に我々の心の中も浄化する。悪と罪に塗れた古い自分は死に新しい自分として生まれ変わるのである。

このように考えてくると「この子らは世の光である」ことは明白になり、「この子ら」の、この世

に存在する「特別な目的」とは我々への「啓発」と言えないだろうか。このことに関して伊藤隆二は次のように述べている。

この子らは、戦争を始めることも、それに参加することもしない。それどころか、自分の利得のために他者と競うこともしない。他者を騙し、ずるく振る舞うことをしない。自然を破壊し、環境を汚染することもしない。純粹で、真心いっぱい<sup>まごころ</sup>に生きている。どこまでも実直である。そして清らかである。この子らは、(たとえ、言葉が話せないほど、知力に重いハンディキャップを負っていても) その飾らない生き方のままで、すべての人に、「どう生きるのが正しいか」を教えている。

この子らに教えられ、導かれ、この子らに赦され、癒され、浄められる人は、現代の社会では多いのだ。争いのない、誰もが助け合い、補い合い、誰もが楽しく、それぞれ生きがいをもって、生き生きと生きていける世の中は、この子らが光りであるから実現するのである。この世に光を送り、何もかも明るく照らし、安らぎとぬくもりと夢と希望を与えてくれるのはこの子らである。

英語で「啓発」を「エンライトenment(enlightenment)」というが、これは「光を灯して教え導くこと」を意味する。その役割を担っているのがこの子らであることははっきりしている。それゆえにこの子らは「啓発児」と呼ばれるのが相応しい。〔伊藤 1995, pp.180-181〕

### 3.5 「この子らは世の光なり」

伊藤隆二によれば、知的ハンディキャップのある「この子ら」は「障害児」ではなく「啓発児」であることは明らかだ、という。「弱い者」である「この子ら」が啓発する人々は一般の人々よりも強い人々である。特に自分の家柄や地位や財産や名誉を誇る「強い者」である。このような「強い者」は眼が曇っていて正しくものが見られない。しかし「強い者」の内、目覚めた人たちは、「弱い者」である「この子ら」の放つ「光」によって曇った眼が晴れ渡る。その「光」は視点を低きに転換する力があり、そのことにより、地上にいるすべての人が互いに理解し、助け合い、補い合う社会の実現可能性が開けてくる。正に「この子らは世の光なり」(伊藤隆二)なのである。したがって「障害児」という言葉は存在する意味を失い、「この子ら」を呼ぶとすれば、普段は各々の名前で呼ぶことは当然として、「この子ら」を敢えてまとめて表現しなければならない時は「啓発児」と呼ぶのが相応しい。以上は、伊藤隆二が発表された論文(伊藤 1983・1985・1990a・1991・1992c・1994a・1994b)・著書(伊藤 1988・1990b・1995)・直接にお話を伺ったこと(大学院修士課程から現在まで)を検討した結果、明らかになった事柄である。

## おわりに—まとめに代えて—

本稿では、『発達の遅れと教育』（全日本特殊教育研究連盟）1992年第415号「特集 人権と用語問題」を中心に検討した。その際、まず「伊藤隆二」と、その師である「三木安正」を比較対照し、次に伊藤の「発達観」を明確にした上で、座談会「人権にかかわる用語をどう改めるか」の中の「伊藤隆二」に言及された箇所を手がかりにし、更に伊藤隆二の「障害児」を廃し「啓発児」と呼ぼう、すなわち「この子らは世の光なり」の教育思想をキリスト教の視点から考察した。その結果、知的ハンディキャップのある「この子ら」は「障害児」ではなく「啓発児」であることが明らかになった。「弱い者」である「この子ら」が啓発する人々は一般の人々よりも強い人々である。特に自分の家柄や地位や財産や名誉を誇る「強い者」である。このような「強い者」は眼が曇っていて正しくものが見られない。しかし「強い者」の内、目覚めた人たちは、「弱い者」である「この子ら」の放つ「光」によって曇った眼が晴れ渡る。その「光」は視点を低きに転換する力があり、そのことにより、地上にいるすべての人が互いに理解し、助け合い、補い合う社会の実現可能性が開けてくる。正に「この子らは世の光なり」（伊藤隆二）なのである。したがって「障害児」という言葉は存在する意味を失い、「この子ら」を呼ぶとすれば、普段は各々の名前で呼ぶことは当然として、「この子ら」を敢えてまとめて表現しなければならない時は「啓発児」と呼ぶのが相応しい。以上が、伊藤隆二の見解を検討した結果、明らかになった事柄である。

なお今後の課題であるが、次の論文の発表を予定している。

1992年の「精神薄弱」用語問題：1992年以降の動向、二つの「法律」から。

上のことを通じて、伊藤教授が主張される、なぜ「この子らは世の光なり」なのか、また、なぜ「障害児」ではなく「啓発児」なのか、ということをも更に深めて考えていきたい。

## 引用文献

安藤房治(1992)「教育の場における人権侵害」『発達の遅れと教育』（全日本特殊教育研究連盟）415, pp.40-43.

本田哲郎(2001)『小さくされた人々のための福音—四福音書および使徒言行録—』新世社。

本田哲郎(2006)『釜ヶ崎と福音—神は貧しく小さくされた者と共に—』岩波書店。

池田太郎・大庭伊兵衛・小出進・小宮山倭・山口薫・藤島岳(1985)「〔座談会〕三木安正先生と精神薄弱教育」全日本特殊教育研究連盟「三木安正先生を偲ぶ会」[編](1985)『三木安正と日本の精神薄弱教育』全日本特殊教育研究連盟, pp.120-146.

伊藤隆二(1983)「発達障害とは何か—新しい意味と解釈—」『教育と医学』（教育と医学の会・慶應通信）31(10), pp.4-11.

伊藤隆二(1985)「発達の遅れている子どもたち—能力主義から『人間主義』への転換を—」『発達の遅れ

- と教育』(全日本特殊教育研究連盟)323, pp.12-19.
- 伊藤隆二(1988)『この子らは世の光なり—親と子と教師のための生きることを考える本—』樹心社.
- 伊藤隆二(1990a)『障害児』から『啓発児』へ—今まさに転回するとき—『誕生日ありがとう運動のしおり』増刊101号, pp.1-5 [<http://www.maroon.dti.ne.jp/okuguchi/yougo.htm>]に転載のものから引用].
- 伊藤隆二(1990b)『なぜ「この子らは世の光なり」か—真実の人生を生きるために—』樹心社.
- 伊藤隆二(1991)『「精神薄弱」「障害」という用語を改正するために』『地域福祉における「用語」および社会的背景に関する研究』—初年度研究報告書—厚生省, pp.7-11.
- 伊藤隆二(1992a)『発達リズムと個性の発見—「その子らしさ」が伸びる条件—』朱鷺書房.
- 伊藤隆二(1992b)『こころの教育十四章』日本評論社.
- 伊藤隆二(1992c)『「精神薄弱」用語問題の現状と展望』『発達障害研究』(日本精神薄弱研究協会) 14(1), pp.1-7.
- 伊藤隆二(1994a)「偏見・差別」石部元雄・伊藤隆二・中野善達・水野悌一(編)『ハンディキャップ教育・福祉事典Ⅱ 自立と生活・福祉・文化』福村出版, pp.878-888.
- 伊藤隆二(1994b)「宗教」石部元雄・伊藤隆二・中野善達・水野悌一(編)『ハンディキャップ教育・福祉事典Ⅱ 自立と生活・福祉・文化』福村出版, pp.929-938.
- 伊藤隆二(1995)『この子らに詫<sup>わ</sup>びる—「障害児」と呼ぶのはやめよう—』樹心社.
- 伊藤隆二(1997)『「発達と教育」の思想の研究—ホリスティック・パラダイムからの考察—』『創価大学教育学部論集』 42, pp.137-153.
- 岩井美奈(1999)「精神薄弱の用語の整理のための関係法律の一部を改正する法律」『法令解説資料総覧』 211, pp.61-65.
- 北沢清司(1992)「知的障害者の親の立場からみた人権と用語」『発達の遅れと教育』(全日本特殊教育研究連盟)415, pp.44-46.
- 北沢清司(2002)「全日本特殊教育研究連盟(全特連)設立 50周年年表」全日本特殊教育研究連盟[編](2002)『教育実践でつづる知的障害教育方法史—教育方法の展開と探究—』川島書店, pp.229-258.
- 松矢勝宏(2000)「全日本特殊教育研究連盟 結成 50年記念大会『50年の回顧・21世紀への展望』」『ノーマライゼーション』(日本障害者リハビリテーション協会)20(3), pp.73-75.
- 三木安正(1950)「創刊のことば」『児童心理と精神衛生』第1号、全日本特殊教育研究連盟[編](1999)『全日本特殊教育研究連盟結成 50年記念 機関誌で見る知的障害教育 50年』全日本特殊教育研究連盟, p.3.
- 三木安正(1956)「新機関誌の発刊に<sup>あた</sup>って」『精神薄弱児研究』第1巻 第1号、全日本特殊教育研究連盟[編](1999)『全日本特殊教育研究連盟結成 50年記念 機関誌で見る知的障害教育 50年』全日本特殊教育研究連盟, p.27.
- 三木安正(1985)「全日本特殊教育研究連盟(全特連)の活動—その発展過程—」全日本特殊教育研究連盟「三木安正先生を偲<sup>しの</sup>ぶ会」[編](1985)『三木安正と日本の精神薄弱教育』全日本特殊教育研究連盟, pp.101-119.
- 西谷啓治(1957)「精神」『世界大百科事典』【第16巻】平凡社, pp.382-383.
- 小川環樹[訳注](1997)『老子』【改版】中央公論社.

- 岡野守也(1999)『唯識の心理学』【新装版】青土社.
- 櫻井芳郎(1992)「人権と用語—その背後にある社会意識—」『発達の遅れと教育』（全日本特殊教育研究連盟）415, pp.36-39.
- 柴田洋弥(1992)「知的障害をもつ人たちは自分の障害とその用語についてどう考えているか」『発達の遅れと教育』（全日本特殊教育研究連盟）415, pp.47-49.
- 清水寛・関陽郎・田ヶ谷雅夫・松友了・山口薫・小出進(1992)「座談会 人権にかかわる用語をどう改めるか」『発達の遅れと教育』（全日本特殊教育研究連盟）415, pp.12-34.
- 静一志(1993)『地の塩と世の光—イエス様のたとえ話—』聖母の騎士社.
- 滝澤武人(1997)『人間イエス』講談社.
- 特殊教育研究連盟[編](1949)『精神遅滞児教育の実際』牧書店.
- 全日本特別支援教育研究連盟(2017)「全特連とは？」[https://manavia.net/community/detail?id=16&topic\\_type=q1](https://manavia.net/community/detail?id=16&topic_type=q1)
- 全日本特殊教育研究連盟[編](1999)『全日本特殊教育研究連盟結成50年記念 機関誌で見る知的障害教育50年』全日本特殊教育研究連盟.